

精神障がい者社会復帰施設利用者の退所後の生活への思い

大坂直文¹⁾・村下麻衣²⁾・青木実枝³⁾

Feelings of Rehabilitation Center Residents with Mental Disabilities about Life after Institutional Care

Naofumi OOSAKA¹⁾, Mai MURASHITA²⁾, Mie AOKI³⁾

Abstract : This study has been conducted on the residents of rehabilitation centers for the mentally disabled to identify their feelings about life after leaving the institutions, with the aim of exploring better support for the mentally disabled upon the resumption of community living.

Analysis of data, gathered in interviews show that samples typically had eight types of sentiments, i.e. "mixture of hope and concerns for job prospect", "financial concerns for daily living expenses that cannot be covered with social resources", "need to make a residential arrangement other than home", "concerns for daily life and recognition of the importance of cooking for oneself", "concerns for communal living", "concerns for having to live with a disease with no clear outlook", "various degrees of hope for life without restrictions outside institutionalized care" and "concerns associated with system changes".

The results clearly indicate that those with mental disabilities currently living at rehabilitation centers have a mixture of feelings about a wide range of issues about life after leaving the centers, including day-to-day issues like cooking and even legal affairs. The study suggests that learning the hopes and concerns these people feel about community living, and reflecting the findings to future supports, will enhance the effectiveness of rehabilitation supports.

Key words : mentally disabled, rehabilitation, feelings, content analysis

緒 言

精神保健医療においては、2004年に精神保健福祉の改革ビジョンが示され、「入院中心から地域生活中心へ」と、2004年以後10年間の方針が示された。その影響等もあり、近年の精神科における入院治療の形態は早期退院による地域生活支援へと変わりつつある。そのため、今後の精神看護の課題として、地域生活をより意識した援助が挙げ

られる。同様に、長い入院期間を過ごしてきた精神障がい者たちが、社会に適応できるように準備を行う場として、社会復帰施設に課せられた課題も少なくはない。

では、精神障がい者が地域で生活していくために我々はどうような援助を行えばいいのだろうか。岡本¹⁾は精神障がい者の地域生活の質の充実のためには、衣食住という最低限の基盤と、社会との接点を持ちながら人間関係の改善や自己決定、自

1) 山形さくら町病院
〒990-0045 山形県山形市桜町 2-75
Yamagata Sakurayou Hospital
2-75 Sakurayou, Yamagata 〒990-0045, Japan
2) 横浜旭中央総合病院
〒241-0801 神奈川県横浜市旭区若葉台 4-20-1

Yokohama Asahi Central General Hospital
4-20-1 Wakabadai, Asahi, Yokohama 〒241-0801, Japan
3) 山形県立保健医療大学 保健医療学部 看護学科
〒990-2212 山形県山形市上柳 260
Yamagata Prefectural University of Health Sciences
260 Kamiyanagi, Yamagata 〒990-2212, Japan

己実現できるような生活の場と周囲の理解が必要であると述べている。また、人的支援や経済的基盤も必要であるとも述べている。このように、精神障がい者の地域生活のためには様々な基盤や支援が必要であるため、それらを充実させ、提供していくことが我々に課せられた課題であることがわかる。

しかし、援助者側の課題が明確であっても、それが当事者たちの意向に合っていないければ、その効果を十分に得ることはできない。谷口²⁾らも、患者が具体的に退院—地域又は施設入居への試みを行う最終段階では患者の思いや希望に寄り添った援助を行うことが、本人の支えとなり、満足感に繋がると述べている。

ところが、実際に社会復帰施設で生活している当事者たちの社会復帰後の生活への思いを明確にした研究は多くはみられない。そこで、当事者たちへのより効果的な援助を検討するために、当事者たちの地域生活への思いを明らかにする必要があると考え、この研究を行うこととした。

研究方法

社会復帰施設利用者の地域生活に対する思いを明らかにした研究は多くはみられない。そこで本研究では、当事者たちへのよりよい援助を考察するため、当事者たちの思いを明らかとすることを目的とした。そのために面接調査を行い、得られたデータの内容分析を行うこととした。

1. 協力者

A県の精神障害者福祉ホームB型²⁾の入居者。
注) 精神障害者福祉ホームB型とは、症状が相当程度改善している人の社会復帰や家庭復帰の援助をするために、生活の場を提供しながら必要な指導等を行なう施設であり、定員は概ね20名で、利用期間が5年以内のものをいう。今回対象とした施設の定員は18名であった。

2. データ収集期間

平成19年8月27日～平成19年8月30日

3. データ収集方法

データ収集は協力者に対し、個別面接にて行った。質問内容は、①退所後の生活で楽しみにして

いること、やってみたくいこと、②退所後の生活で心配なこととし、質問内容に対して自由に語っていただいた。回答の内容は録音にて記録を行った。また、インタビュー時の協力者の話し口調や表情などの非言語的な情報に関する客観的な視点を分析時に取り入れるため、インタビューは共同研究者の同席の下に行った。

4. データの分析方法

精神障がい者は言葉による自己表現が苦手であることが多く、非言語的な情報を取り入れる必要があると考えたため、分析はHolisti,O.Rのメッセージ分析²⁾に基づいて行なった。

注) メッセージのある特定の属性を客観的かつ体系的に同定することによって推論を分析する技法。

- 1) インタビュー内容を逐語録に起こした。聞き取り難い言葉や文末の表現が曖昧なもの等は、前後の文脈等を踏まえつつ、インタビュー時の表情や態度、口調などを共同研究者と共に確認しながら吟味した。
- 2) 逐語録としたものを意味のまとまりに区切った後、協力者が伝えようとしたことを忠実に汲み取れるよう、共同研究者と共に非言語的情報に注意しながら要約した。
- 3) 要約したものから退所後の生活に関連したデータを抽出していき、類似したものをまとめてカテゴリー化を行った。ここでも、協力者の思いが反映されたものになるよう注意しながら、具体的にカテゴリーのネーミングを行なった(図1)。

5. 倫理的配慮

事前に、施設管理者に文書を用いて研究の概要や当事者へのインタビュー内容等の説明と、協力の依頼を行った。管理者の承諾を得た後に、施設内に文書を掲示していただき、利用者に対し協力を依頼した。その後研究者は施設利用者と共に施設内で活動し、活動の最終日に研究への協力の意思の確認を行なった。研究に協力する意思を表明した利用者に対して、研究の趣旨、方法、インタビュー内容の説明、インタビューへの協力は自由意志であり途中で中止することも可能であること、内容は録音にて記録すること、データは研究以外での使用はせず、個人が特定されないように処理

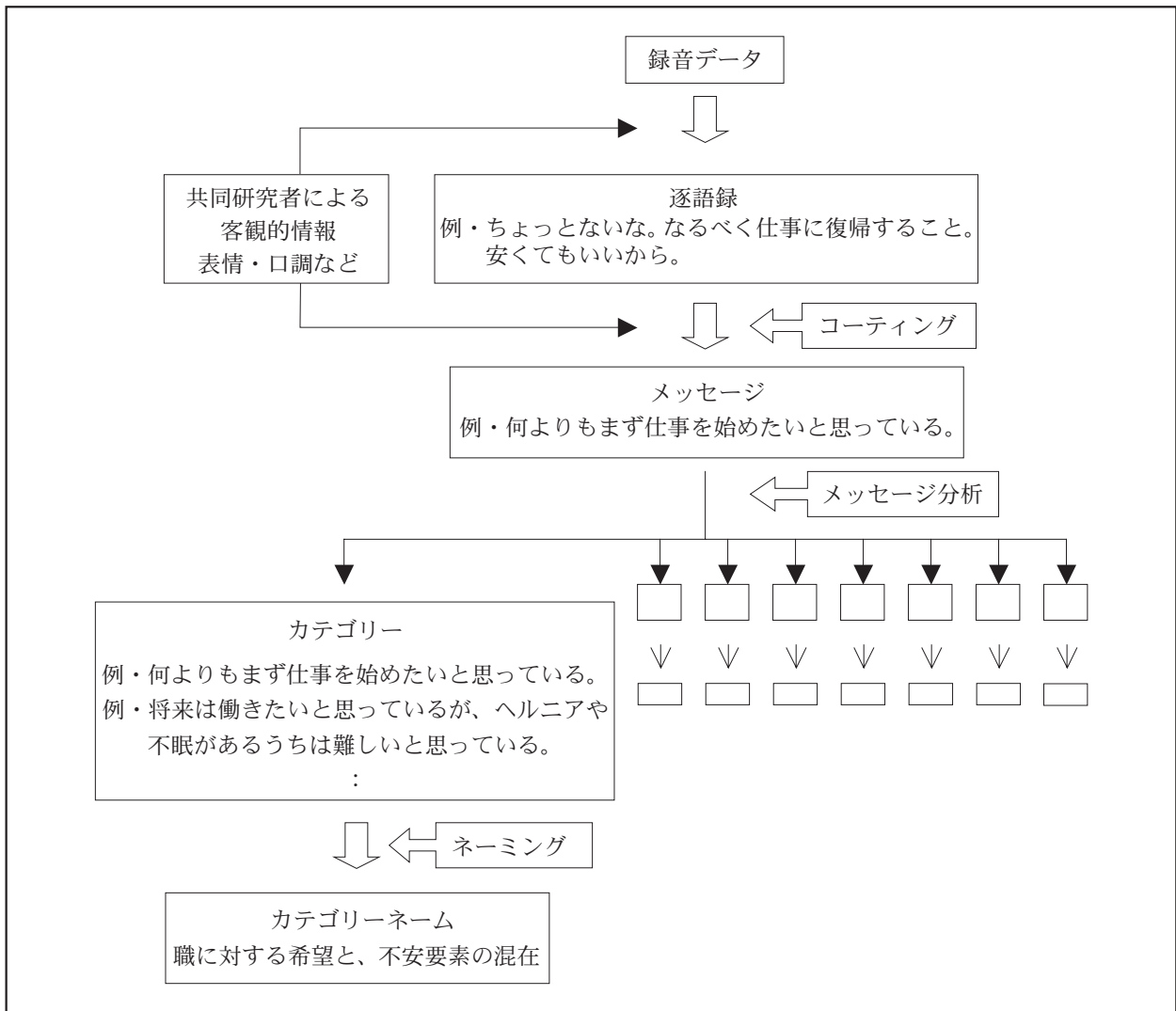


図1 内容分析のプロセス

することを文書を提示しながら、口頭で再度説明し、同意を得た後にインタビューを行なった。

6. 真実性の確保

インタビュー時の緊張感を緩和、および対象者の自己表現の方法等についての理解を深めるため、対象者に研究についての説明を行なった後に3日間施設内で活動し、対象者との交流を深めた。その後、対象者全員に協力の意思を確認し、同意が得られた対象者にインタビューを行った。

また、分析は精神看護領域を専門とする教員の指導を受け、共同研究者の客観的な意見を取り入れながら行った。

結 果

1. 協力者の概要

A県の精神障害者福祉ホームの入居者全16名

中、研究への協力に承諾が得られた男性利用者12名。平均年齢は52.8歳であり、それぞれ、30代1名、40代3名、50代5名、60代3名であった。

2. データの概要

インタビュー時間は、平均4分程度であった。また、意味単位数は150単位であり、その中で意味の通じないものや内容が適切でないものを除いた86単位を使用した。

3. 退所後の生活への思い

社会復帰施設利用者の退所後への思いを調査した結果、食生活に関するものから制度に関するものまで幅広いデータを得ることができた。得られたデータの内容分析を行った結果（本文中では抽出されたカテゴリーを【】、協力者が語った内容を筆者が要約したものを「」、協力者の語った内容を

“”で表す。また、「」や“”内の（）は筆者による補足とする。）、【職に対する希望と、不安要素の混在】、【社会資源だけでは補いきれない生活資金への不安】、【実家以外での住居の確保】、【日常生活への不安と自炊の大切さの認識】、【第三者との生活への思い】、【先が見えない疾病との付き合いへの不安】、【退所後の制約のない生活での様々な希望】、【制度の変更に伴う不安】の8つのカテゴリーに分類された。

1) 【職に対する希望と、不安要素の混在】

ここでは、「自分に合った職業を探し、その職業の訓練を受けたいと思っている」、「賃金は少なくてもいいので、仕事をしたいと思っている」等、退所後の就職への意志を読み取ることができた。しかしその反面、「職業訓練校に行き、訓練を受け、就職することがうまくいくかどうか心配している」、「これから就職するということは、病気や偏見、年齢等の理由により、難しいと感じているので、実家の手伝いをしようと思っている」、「将来は働きたいと思っているが、ヘルニアや不眠があるうちは難しいと思っている」等、実際に就職できるのかということへの不安や、疾患や年齢による諦め、身体状況により就労が困難な状況であること等、現実を認識し、様々な問題と向き合っていることも明らかとなった。

2) 【社会資源だけでは補いきれない生活資金への不安】

ここでは、「生活保護の金だけでは足りないので、退所後の金銭的な心配をしている」とあるように、現在受けている年金や生活保護の金額では退所後の生活資金として足りないであろうという金銭的な不安を抱えていることが明らかとなった。

また、“(退所後の生活で自炊をしていくには)金もかかるし。年金もらってもそんなにあるとは限らないから”、“それがね、やっぱり、ここから退所した場合ね、経済的には普通の不動産屋で部屋を借りてはちょっとやっていけないんだよね。市営住宅に申し込んで、そうしたら何とかやってけるんじゃないかなって思うんですよ”という協力者の言葉から、経済的な問題に関するカテゴリーは、日常生活や住居の確保等、他のカテゴリーと影響し合っていることも明らか

かとなった。

3) 【実家以外での住居の確保】

ここでは、「退所後に、どこで生活するかを心配している」、「仕事と現在通っている病院への通院を考慮し、病院に通える距離で生活しようと考えている」等、退所後の住居の心配や自分の状況に合わせた退所先の検討をしている協力者の様子が表出された。中には、“どこに住むか、自分の命だね。命が心配なの”と、住む場所が決まらなければ生活できない、すなわち、生きていけないと、自分の命を結び付けて考えている協力者も居り、協力者にとって住居を確保するということがいかに重要であるかが明らかとなった。

このように協力者たちが退所後の住居について様々な思いを抱えていることが明らかとなったが、「退所後は家族の元で生活したいと考えているが、調整がつかないでいる」と、家族の元での生活を望んでいても実際は困難な現状である当事者も存在した。これにより、福祉ホーム入居者にとっては、実家を社会復帰の場として選択することは困難であるということも明らかとなった。

4) 【日常生活への不安と自炊の大切さの認識】

「一人暮らしとなれば、自炊をしななければいけないため、自炊での食事の献立について心配している」、「今まで料理をしたことがなかったので、一人暮らしに向けて、料理を覚えようとしている」等、自炊についての不安や意気込みがあり、退所後の生活における自炊への意識の高さが伺えた。

また、“足がちょっと、歩くのがちょっと苦手なもんだから。自転車はなんともないんだけど、立って歩くと足腰に負担がかかるっていう、そういう心配はあるんだけどね”と、身体的な問題による移動に関する不安も語られた。掃除や買い物については、「彼女ばかりに頼るわけにはいけないので、料理、掃除、買い物等、日常生活に関することも学んでいきたいと思っている」と、前向きな意思を持っていることがわかった。

5) 【第三者との生活への思い】

ここでは施設外の人物への思いが語られているが、特に家族に対するものが多く、「ひとりで

生活している母親がいて、今後どうやって面倒をみていくか心配している」, 「孫に会いたいと思っている」等, 家族の心配や家族に会いたいというものがあつた。

また, 「結婚により, 家族の心配の解消や自分にとってもプラスになると思ひ, 結婚や結婚につながるような出逢いを望んでいる」等, 新しい家族の形成という希望や, 「自分の引っ込み思案な性格による, 人付き合いを心配している」といった, 自分の性格による人間関係への不安等もみられた。

6) 【先の見えない疾病との付き合いへの不安】

「今は, 再発の心配はないと思っているが, その確証が得られず, 再発の心配をしている」と, 現時点では落ち着いているようである疾患に対し, 心のどこかで再発への警戒心を持っているようであつた。その中には, “再発…, 薬さえ飲んで, 環境の整ったところにいれば, 大丈夫だと思う”と語っているように, 再発を心配してはいるが, 再発を未然に防ぐための方法を自分なりに見つけている協力者も存在した。

また, 「処方された薬の種類によってはおもしろい感じがするため, 薬が自分に合うかどうかを心配している」, 「薬(不眠症のものと思われる)の効果が得られていないため, この先どうなるかに不安を感じている」等, 薬効や副作用についての不安も存在していた。このように, ここでは, 先の見えない健康状態に関する思いが明らかとなつた。

7) 【退所後の制約のない生活での様々な希望】

ここでは, 「退所後は今までできなかったわがままができると思ひ, 自由な生活を楽しみにしている」とあるように, 退所後の生活は自由であり, やりたいことができるという協力者たちの思いを読み取ることができた。実際の内容としては, 「車の免許を取りたいと思っている」, 「昔好きだったバイクに乗りたいと思っている」等, 様々であつた。

また, “自分が国の世話にもなってきたから, 国に返すつもりでいたから, 少し傾聴ボランティアの勉強して, 講座受けて, なんぼでも国のほうに返したいなって思つて”と語っているように, ただ自分のやりたいことをやるのではなく, 社会性等も考慮した上で目標を定めてい

ることも明らかとなつた。

8) 【制度の変更に伴う不安】

このカテゴリーでは, 「65歳まで施設にいたつもりだったが, 入居期間が変更となり, それまでの期間をどう過ごすか戸惑っている」とあるように, 自立支援法の影響と思われる入居期間の短縮により, 自分が考えていた退所後の予定の見通しがつかなくなったために生じている不安が読み取れた。

考 察

1. 仕事について

本研究では, 【職に対する希望と, 不安要素の混在】にあるように, 当事者の就職への意識の高さが明らかとなつた。【社会資源だけでは補いきれない生活資金への不安】で, 就労による収入がなければ地域生活は辛いという不安も表出されていることも考慮すると, 当事者たちにとって就職とは, 夢や希望というよりは地域生活を行うための収入源の確保としての意味も大きいと考えられる。すなわち, 生活の為には就労が必要であるという現実認識が行なわれていることがわかる。

また, 本研究では, ただ就職への漠然とした希望を持っているというだけではなく, 年齢の問題や偏見など就職に関する諸問題についての現実の認識や不安も抱えていることも明らかとなっている。

以上のように, 社会復帰施設利用者たちは就職への希望と現実に板ばさみにされている現状が明らかとなつた。このように, 希望と現実の間で揺れ動く当事者の心理を理解した上で, 就職に関する援助を行つていくとともに, 当事者たちの働く意欲を生かせるような場所の確保や, 偏見を無くすための活動等が今後の課題として挙げられる。

2. 経済面について

【社会資源だけでは補いきれない生活資金への不安】では, 退所後の生活を考えたとき, 現在支給されている年金等の社会資源からの収入だけでは, 生活していくことができないのではないかと不安を当事者が抱えていることが明らかとなつた。影山³⁾らが, 40%もの在宅精神障がい者が経済的に問題を感じていることを明らかにしているように, 実際, 当事者たちにとっての社会復帰は経済的に困難であることが多い。

経済面での不安は、日常生活や住居の確保への思いにも影響を与えることも明らかとなったため、経済面に関する支援には力を入れなければいけない。当事者たちが収入源の確保と就職を結び付けて考えているという結果も本研究で明らかとなったため、就職と合わせて支援を行うことがよりよい解決策として挙げられる。しかし、当事者たちの就職の困難さという問題もあるため、利用できる社会資源の提示とともに、資金の管理や使用法を当事者たちと一緒に考えることも必要となるのではないだろうか。

3. 退所先について

本研究では、【実家以外での住居の確保】で示したように、自宅を社会復帰施設退所後の生活の場として考えていない傾向にあることが明らかとなった。

しかし、飯塚⁴⁾らは、自宅を退院後の生活の場として考えている精神科入院患者が43%を占めていることを明らかにしている。精神科に入院している患者と社会復帰施設に入所している当事者でこのような相違が生じているのは、家族の受け入れの難しさや、当事者たちの現実に対する認識の違いがあるためではないだろうか。その理由として、社会復帰施設の入居者の中には、退院後、自宅に帰ることができなかつた入居者や、一時は自宅に帰ったが、その後、何らかの理由により社会復帰施設に入居することになった入居者が含まれ、現実に対する当事者たちの認識が高まっているということが考えられる。

つまり、社会復帰施設入居者にとっては、最終的な社会復帰先として自宅を選択することは難しく、その現実を受け入れざるを得ない現状にあるのではないだろうか。退所先の選択肢として自宅が挙がらない現状の中では、それに代わる適切な社会資源の紹介や住居の確保、日常生活を送るための様々な技術を提供していくこと等、様々な援助を行っていくことがより必要となってくる。

4. 生活全般に関して

日常生活についての項目では、退所後の生活における自炊への意識の高さが明らかとなった。施設に入居し、入所前の生活ではあまり経験することのなかつた調理を行わなければいけなくなつた

ことで、その難しさに直面し、戸惑いや食事の意義を感じたことで、この結果が生じたと考えられる。

しかし、自炊に対する高い意識の中で、不安だけではなく前向きな意思も読み取ることができたのも、実際に自分の身を持って調理の大変さを体験したことの影響であると考えられる。自ら体験することで、その大変さを退所後の生活に結びつけて、より現実的に考えることができるようになり、退所後の生活に向けて少しでも能力を高めていこうとする意思が生じたのではないだろうか。

また、食事を用意するという一連の行動の中には、他の入居者への配慮、買い物などの社会的スキルや時間配分などの計画性の会得等、様々な効果が含まれる。日常生活行動といえど、地域生活への意識を高めるための機会となり得ること、当事者たちにとっては様々な能力を培うための活動となること、その分負担にもなり得ることを考慮しながら、援助を行わなければならない。

5. 人間関係について

【第三者との生活への思い】では施設外の人物、特に家族に対して様々な思いを持っていることが分かった。川口⁵⁾らも、同居の有無に関わらず家族が最大の支持者であると述べているように、当事者たちにとっての家族の存在というのは大きいものであると、本研究の結果からも考えられる。新しい家族の形成への思いというのも、支持者、すなわち拠り所の形成を望んでいる気持ちの表れではないだろうか。

しかし、裏を返せば、退所後の生活における拠り所が、家族以外の他に思い浮かばないという交流の狭さも考えられる。そのため、拠り所の少ない当事者たちの心の支えとなれるようなフォローを行っていくことが大切となる。

また、川口⁵⁾らが当事者の多くがコミュニケーションにぎこちなさを感じていると述べているように、本研究においても、人付き合いがうまくできないことを自覚していることが明らかとなった。退所後には社会的交流がより必要となるため、家族関係と合わせて、人間関係に関する相談等に親身に向き合っていく姿勢や、人付き合いを学ぶことが出来るような関わりが求められる。

6. 疾病に関して

疾病に関しては、現在の状態について前向きである協力者が多かったが、これから先のことには大丈夫だと確信が持てていないという傾向にあった。

しかし、その中には、「再発が一番の心配ではあるが、利用できる資源や環境が整っていれば大丈夫だと思っている」という協力者も居り、疾病との付き合い方を自分なりに折り合いをつけることも可能であるということが示唆された。宇佐美⁹⁾らの研究では、地域生活に成功している精神障がい者のセルフケアとして、日常生活、症状、服薬の調節に工夫がみられていることを明らかにしている。すなわち、この協力者のように、疾病に対する理解や対処法を身につけていけば、確信は持てずとも、疾病とうまく付き合うことができ、地域生活の成功にもつながるのではないだろうか。疾病に不安を抱える当事者が安心して生活していけるよう、我々援助者は、個々に合わせた社会資源や疾病に関する知識の提供を行っていく必要がある。

7. 希望について

本研究では質問項目を絞らずに大きくとつたため、仕事や住居等の社会復帰する上で必要であろうとある程度予想していた結果の他に、趣味活動や車の免許の取得、ボランティア等様々な希望を持っていることが明らかとなった。今までは病院や施設等、何かと制約の多い中で生活し、そういったごく当たり前の希望も叶えられないでいたために、多くの希望が語られたのではないだろうか。希望や目標を持つことは生きていく上での糧となるため、希望や目標を引き出し、導いていくことで社会復帰への意欲も向上するだろう。社会復帰を考えた場合、どうしても就職や社会復帰先等に重点をおいてしまうが、今回の結果でわかったように、当事者たちは社会復帰に対して様々な希望や目標も持っているということを念頭に置き、援助に生かしていきたい。

8. 制度について

制度について語った協力者のインタビューでは、制度の変更による今後の入居期間への不安が何度も表出され、制度の変更の当事者への影響が大き

さを窺うことができた。制度が変更されるということは、使える社会資源の変更、すなわち生活の基盤そのものの変化にもつながる。そのため、何らかの社会資源を利用している者にとっては、大きな問題である。本研究ではそういった問題に直面している当事者の現状が浮き彫りになった。我々が制度そのものの変更に携わるということは現実問題として困難であるため、まずは、当事者たちを取り巻く諸制度をよく理解した上で、個々に合わせた選択肢を提供していかなければいけない。

研究の限界

今回の研究では女性から協力を得ることが出来ず、男性協力者のみのデータとなってしまったため、データの偏りは否定できない。女性の協力得てデータを蓄積し、今回の成果を検証したい。

結 論

社会復帰施設で生活する精神障がい者は内容や程度は違えど、退所後の生活について様々な思いを抱いていることが明らかとなった。

思いの内容については、退所後の生活についての漠然とした思いを抱いてるわけではなく、現実的な視点から退所後の生活について考えていることが明らかとなった。それとともに、地域で自立した生活を行っていくうえでの諸問題についても現実的に考えていることが明らかとなった。しかし、現実認識はできているものの、それを自己実現に結び付ける段階で戸惑いが生じることが多いようである。そのため、当事者たちが現実認識し、自己決定したことを自己実現に結び付けていくことができるような援助が必要であることが示唆された。

また、就職先や住居の決定および社会制度の変更など、社会状況や社会システムなどの影響を受け、個人の考えや努力ではどうにもならないことに関しては不安が大きく、食に関する行動や自身の夢など、個人の考えや努力で実現可能なものについては前向きな傾向にあることも明らかとなった。そのため、精神障がい者の社会復帰支援では、地域や社会との関わりに介入していくことが、効果的な援助であると考えられる。

謝 辞

お忙しい中、本研究にご協力いただいた協力者の皆様、ならびに研究を行う場を提供、調整してくださいました福祉ホームのスタッフの皆様へ深く感謝いたします。

引用文献

- 1) 岡本隆寛：精神障害者の地域生活における現状と課題（第1報）－暮らしやすさに焦点を当てた質問紙調査より－. 順天堂大学医療看護学部医療看護研究. 2007；3（1）：15-21.
- 2) 谷口美津雄, 原田恵子：回復過程の患者の退院援助に関わって－精神障害者退院促進支援事業導入の症例から－. 日本看護学会論文集精神看護. 2004；35：18-20.
- 3) 影山隆之, 大賀淳子, 河島美枝子：在宅精神

障害者の日常生活における困りごと・苦手なこと～当事者と家族との意識のずれ. 大分看護学研究. 2002；3（2）：33-39.

- 4) 飯塚あづさ, 山口澄江, 秋山智恵ほか：当院精神科入院患者の「生活の場として」の今後を考える～患者, 家族へのアンケート結果を通して～. 福島農医学. 2006；48（1）：110-113.
- 5) 川口優子, 松田宣子, 奥田博子：地域に住む精神障害者の生活と意見. 神大医保健紀要. 2001；17：25-31.
- 6) 宇佐美しおり, 山村真佐枝, 水谷明美ほか：地域生活を促進・維持する精神障害者のセルフケアとサポートシステムモデルの開発, 兵庫県立看護大学紀要. 2001；8：115 - 125.

— 2009. 2. 3 受稿, 2009. 3. 2 受理 —

要 旨

本研究は、精神障がい者が社会復帰する上でのよりよい援助を考察するために、社会復帰施設を利用している精神障がい者が退所後の生活についてどのような思いを抱いているのかを明らかとすることを目的とした。

面接調査で得られたデータを内容分析した結果、【職に対する希望と、不安要素の混在】、【社会資源だけでは補いきれない生活資金への不安】、【実家以外での住居の確保】、【日常生活への不安と自炊の大切さの認識】、【第三者との生活への思い】、【先の見えない疾病との付き合いへの不安】、【退所後の制約のない生活での様々な希望】、【制度の変更に伴う不安】という8つの思いを抱いていることが明らかとなった。

この結果から、社会復帰施設で生活している精神障がい者は、退所後の生活について料理等の日常生活に関するようなことから法律に関することまで、幅広い事柄について様々な思いを持っていることが明らかとなった。当事者が地域生活に対して抱いている希望や不安を知り、その思いを今後の支援に生かすことで、社会復帰支援がより効果的なものになることが示唆された。

キーワード：精神障がい者, 社会復帰, 思い, 内容分析